

万葉集の「をとめ」「をとこ」考

太田 真理

はじめに

古代より男女を呼ぶ称には様々なものがある。思いつくものをあげてみても、妹、背、君、をとめ、をとこ、ますらを、たわやめなどの語ががすぐに思い浮かぶ。これらは何れも、男女を第三者的に呼び表わすもので、妹―背、妹―君、をとめ―をとこ、ますらを―たわやめなどの対をつくると考えられ、『万葉集』ではさかんに歌に詠まれるのだが、中古以降は歌に詠まれることは殆どなく、歌のこゝとばかり姿を消してしまふという特色がある。

本稿では、歌における男女を規定することばの中から、「をとめ」「をとこ」に注目し、『古事記』に遡ってその前史を問いつつながら、それらが当時の歌全体においてどのような意味を持っていたのか考察していきたい。なお、『古事記』によれば、「をとめ」には「童女」「美人」「媛女」「嬢子」「少女」「嬢女」などの字をあてるが、歌の部分で仮名書きされている例から「をとめ(袁登賣、遠登賣)」と訓んでよいと判断できる。また「をとこ」については、「丈夫」に対して割注で「訓丈夫袁等古」とあり、「をとこ」と訓むことが判る¹⁾。

一 「をとめ」「をとこ」とは何か

『万葉集』には、「をとめ」を詠んだ歌が多い²⁾。そして、「をとめ」の対義語は、「をとこ」であるといわれる。では、「をとめ」「をとこ」とは、そもそもどのような意味をもつ存在なのであろうか。『古事記』国生みの段には、

○故爾に反り降りて、更に其の天の御柱を先の如く往き廻りき。是に伊邪那岐命、先に「あなにやしえをとめ(袁登賣)を。」と言ひ、後に妹伊邪那美命、「あなにやしえをとこ(袁登古)を。」と言ひき。如此言ひ竟へて御合ひして、生める子は、淡道之穂之狭別島。

とある。伊邪那岐・伊邪那美の二神が国生みのために婚するにあたり、互いに「をとめよ」「をとこよ」と呼び合っているのだが、この簡潔な呼びかけの語が、そのまま互いを讃めることばになつていくというところは「をとめ」「をとこ」の基底となる大切な要素であろう。また、『風土記』常陸國香島郡「童子女松原」伝承の条には、

○その南に童子女の松原あり。古、年少き童子ありき。俗、かみのをとこ・かみのをとめ(加味乃乎止古・加味乃乎止賣)といふ。男を那賀の寒田の郎子と稱ひ、女を海上の安是の嬢子と號く。竝に形容端正

しく、郷里に光華けり。

という記事がある。ここでは、やがて嬺歌の場に出逢うことになる「年少き」男女の「童子」を「かみのをとこ・かみのをとめ」と特別に註している。その上、二人の名前には「那賀の寒田」「海上の安是」という地名が冠されていることから、二人はそれぞれの土地の神に奉仕する神男、神女であったと考えてよいだろう。

折口信夫氏は「をとめ」「をとこ」の原義について、

WOTは、復活する・元に戻るの義で、常に交替して神事に奉仕する男子・女子が、woto-ko, woto-meなのであった。

と(3)いい、また、

壮夫、未通女、處女など古くから當てるが、村の神人たるべき資格ある成年戒を受けた頃の者を言うたのが初めてであらう。

として(4)いる。

『万葉集』の筑波山歌垣の歌(巻九・一七五九)でも、歌垣にのぞむ男女を「をとめをとこ(未通女壮士)の行き集ひかがふかがひに」としていることから、先にあげた「童子女松原」伝承と同様、歌垣にのぞむ男女が、「をとめ、をとこ」と並び称されたことがわかる。歌垣の根本には神婚の模倣があった。その場に集う男女は、自らを神婚になぞらえてふるまう。何れにしても、単なる男女の呼称ではなく、その背景には何らかの、神への関わりを感じさせることばであることは確かであろう。

いま少し、『古事記』の記事を詳しくみていこう。古代の王は妻覓ぎをする。王の旅は「行幸」とも、また「遊行」ともされる(5)。「遊行」とは、「行幸」のなかの一要素と考えられ、行き場を定めず出歩くことだが、その目的はまさに妻覓ぎ、即ちよき「をとめ」を探すこ

とであつた(6)。古代王権が周囲の地方へ勢力を拡げ、より堅固な支配体制を成立させていく過程において、その土地の神に仕える「をとめ」や支配者の娘と婚を結ぶことは、その土地を支配下に置くことと等値であつた(7)。その意味で、恋は純粹に私的なものではなく、王権の成立に組み込まれた公的な性格を帯びたものであつたといつてよい。

その妻覓ぎの出遊の途上で、王は「をとめ」に出逢う。

○故、大毘古命、高志國に罷り往きし時、腰裳服たるをとめ(少女)、

山代の幣羅坂に立ちて歌曰ひけらく、……(中・崇神天皇・建

波邇安王の反逆)

○故、木幡村に到り坐しし時、麗美しきをとめ(嬢子)、其の道街

に遇ひき。爾に天皇其のをとめ(嬢子)に問ひて曰りたまひし

く、……。(中・応神天皇・矢河枝比賣)

○天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の濱にとめ(童女)

有りき。其の形姿美麗しかりき。故、是のをとめ(童女)と婚

ひして、宮に還り坐しき。(下・雄略天皇・吉野)

○又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比賣を婚ひに、春日に幸行

でましし時、をとめ(媛女)道に逢ひき。(下・雄略天皇・金鉏岡・

長谷の百槻枝)

などのように、「をとめ」との出逢いの場合は、坂、道、道街ちまた、河辺であつた。これらの場所は、古代では、不特定多数の人や物が行き交い、市がたつたり歌垣が行われたり、また道占が行われたりする場所であり、異郷(異界)との接点でもあつたのである(8)。そのような出逢いの場ではしばしば、「自分がをとめに逢う」のではなく、「をとめが(自分に)逢ふ」という表現をとる。出逢いは、こちら側の意志に関係なく向

こう側からやってくるのである。

「をとめ」との出逢いは、突然、偶然やってくる。その時、「をとめ」は何の予告もなく、目の中に飛び込んでくる。今、「をとめ」との出逢いと書いたが、出逢った瞬間には、こちらの者には、その相手は何者なのかはわからない。しかし、その姿は、「麗し」「容姿甚麗」「容姿端正」と一様に形容され、それを「をとめ」であると認識する。王はそれを「見感^め」で、歌をうたいかけ、その結果、「枕く」「寝」「婚ばふ」などと婚を結ぶこととなる。王を含む「をとこ」として「をとめ」とは姿かたちの美麗なるものであり、それを「見」、婚するにふさわしい相手と判断することに「をとめ」との出会いの重要性はあった。

ところで、「をとめ」と出逢い婚を結び首尾よくその地の支配権を得る場合がある一方、「をとめ」はしばしば出逢いの後、ふいに姿を消してしまふ。

○又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比賣を婚ばひに、春日に幸行でましし時、をとめ(媛女)道に逢ひき。即ち幸行を見て、岡の辺に逃げ隠りき。(下・雄略天皇・金鉏岡・長谷の百槻枝)

○故、大毘古命、高志國に罷り往きし時、腰裳服たるをとめ(少女)、山代の幣羅坂に立ちて歌曰ひけらく、……是に大毘古命、恠しと思ひて馬を返して、其のをとめ(少女)に問ひて曰ひしく、「汝が謂ひし言は何の言ぞ。」といひき。爾にをとめ(少女)答へて曰ひしく、「吾は言はず。唯歌を詠みつるにこそ。」といひて、即ち其の所如も見えず忽ち失せにき。(中・崇神天皇・建波邇安王の反逆)

とあるのがそれで、袁杼比賣の場合は結婚の拒否を、山代の幣羅坂

の「をとめ」は對話の不成立をそれぞれ表わしていると考えられる。それが眼前から姿を消す、見えなくなると表現されていることが、やはり「偶然にやってくる出逢う」存在としての「をとめ」をよく表わしているといえようが、ここでは、「をとめ」が、住む世界を異にする、こちら側の理解を超えた不可知なものとして存在している一面が見て取れる。

では、「をとこ」の場合はどうであろうか。『古事記』の、大國主命が八十神とともに八上比賣を妻問いに出かける段では、大國主は八十神に謀られ焼き殺されるが、

○蛤貝日賣、待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しきをとこ(壯夫)に成りて、出で遊行びき。(上・大國主命・八十神の迫害)

と、手当てを受けた結果再生する。この時注目すべきなのは、殺される以前の大國主は八十神によって従者の格好をさせられていたが、再生の結果「麗しきをとこ(壯夫)」の姿になって、遊行するということである。「をとめ」を求めて遊行し婚にのぞむ者の資格として、「麗しきをとこ(壯夫)」であるという外見的要素の重要性がうかがわれる。他にも、

○爾に海神の女、豊玉毘賣の従婢、玉器を持ちて水を酌まむとする時に、井に光有りき。仰ぎ見れば、麗しきをとこ(壯夫)有りき。(上・火遠理命・海神宮訪問)

○乃ち其の矢を將ち来て、床の辺に置けば、忽ちに麗しきをとこ(壯夫)に成りて、即ち其のをとめ(美人)を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比賣命と謂ひ……(中・神武天皇・勢夜陀多良比賣)

○是にをとこ(壯夫)有りて、其の形姿威儀、時に比無きが、

夜半の時に儼忽到来つ。……「麗美しきをとこ(壯夫)有りて、其の姓名も知らぬが、夕毎に到来て共住める間に、自然懐妊みぬ。」といひき。(中・崇神天皇・三輪山伝説)

などとある。何れも妻問いの物語中の例なのだが、「仰ぎ見れば」忽ちに麗しきをとこ(壯夫)に成りて「夜半の時に儼忽到来つ」とあるように、「をとこ」もふと気づくとそこにいる、忽ちに現れる存在であることがわかる。そしてその出逢いの際「麗し」「形姿威儀時に比無し」と、一目で分かる姿の美しさを持っているのも「をとめ」と共通の要素である。

これらのことから、『古事記』では、「をとめ」「をとこ」は、出逢いの場面で男女を讃めていうことばとして対の存在であると確認することができよう。

二 「をとめ」をうたう歌

次に、万葉集において「をとめ」をうたった歌をみていきたい。をとめに対する憧れ心、或いは恋心をうたった歌は多いが、そのほとんどは雑歌に分類される。

嗚呼見の浦に舟乗りすらむをとめ(憾孀) らが玉裳の裾に潮満
つらむか (①四〇)

大夫は御獵に立たしをとめ(未通女) らは赤裳裾引く清き浜び
を (⑥一〇〇一)

藤原の大官仕へ生れつくやをとめ(處女) がともは羨しきろか
も (①五三)

前の二種は行幸時の人麻呂と赤人の歌で、三首目は藤原の宮の御井

の聖水を讃えた歌である。何れも宮廷行事の景の中に嵌め込まれた「をとめ」の姿を描写している。この場合の詠み手は宮廷に仕える男性官人であり、「をとめ」は、彼らと共に仕える宮女たちであろう。保坂達雄氏は、四〇の歌について、この伊勢国行幸の目的を聖地巡礼と捉え、舟遊びや女官たちの浜辺の遊びが、常世波の靈威を身に着ける呪的な意義を持つと解した⁹⁾。この指摘は、「をとめ」が神事に関わり、讃めにつながるという本来的な性格を保存していることを、別の面から証することにつながると考えられる。また、森朝男氏は、このような宮廷の「をとめ」を詠む歌は、「をとめ」の属する宮廷の華やかさを讃える比喩になつていと指摘する¹⁰⁾。保坂氏は神事の面から、森氏は宮廷の面から「をとめ」を捉えているが、天皇を神として、宮中に奉仕する采女や宮女を巫女をになぞらえ、神に仕える「をとめ」と同じ意味を持つと意味づけている点で、両氏の説は本質的につながると考えられる。

この時、詠み手はその風景を、少し離れた場所から見やっている。「をとめ」への憧れを歌いながら、「をとめ」と詠み手は決して同じ位置に立つことはない¹¹⁾。それによって「をとめ」のいる世界と詠み手の世界とは区別され、結果として「をとめ」の属する世界即ち宮廷を讃美することになるといふことなのであろう。

さらに、羈旅歌には、旅先の土地の「をとめ」(海人娘子)を詠む歌も多い。

玉藻刈る海人をとめ(未通女) ども見に行かむ舟楫もがも波高
くとも (⑥九三六)

海人をとめ(憾孀) 玉求むらし沖つ浪畏き海に舟出せり見ゆ

(⑥一〇〇三)

あり通ふ難波の宮は海近み海人をとめ(童女)らが乗れる船見
ゆ (⑥一〇六三)

これらの「をとめ」も専ら景の外、しかも距離的に少し離れた場所から、海辺にいたり小舟に乗る姿を描写したり、或いはその姿を見たい、見ようと詠まれている。旅先で目にした「海人」の様子は、都人である詠み手にとつては異郷を感じさせるものであり、「海人をとめ」は、異郷の象徴として詠まれたのであろう。さらには、赤人は、

天地の遠きがごとく日月の長きがごとくおしける難波の宮
に我ご大君 国知らすらし 御食つ国 日の御調と淡路の野
島の海人の海の底沖つ海石に 鰻玉 さはに潜き出 舟並めて
仕へ奉るし 貴し見れば (⑥九三三)

と、瀬戸内の海人が宮廷に食物を納めることを以て奉仕する人々であったことを詠む。このことから、海人或いは海人をとめを詠む歌は、朝廷に奉仕する「をとめ」を拡大して解釈し、そういう「をとめ」を見ようと詠むことも、やはり宮廷を讚美する意味を持っていたと考えられるのではないか。

次に、あらためて「をとめ」の歌で相聞に分類されている歌をみてゆくが、それは「をとめ」の歌全七十四首のうち九首ときわめて少数である。

をとめ(未通女)らが袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき吾は
(④五〇一)
をとめ(感婦)らが玉篋なる玉櫛の神さびげむ妹に逢はずあ
れば (④五二二)

古ゆ言ひ継ぎけらく恋すれば苦しきものと玉の緒の継ぎて

は言へどをとめ(處女)らが心を知らにそを知らむよしのな
ければ夏麻引く命かたまけ刈り薦の心もしのに人知れずも
となぞ恋ふる息の緒にして (⑬三三五)

物思はず道行く行くも青山を振り放け見ればつつじ花には
えをとめ(未通女)桜花盛えをとめ(未通女)汝れをぞも我れ
に寄すといふ 我れをもぞ汝れに寄すといふ 荒山も人し寄す
れば寄そるとぞいふ汝が心ゆめ (⑬三三〇五)

このうち、五〇一と五二二は序詞としての用法である。(他に四首、相聞歌全体の半数を超える六首がこの用法である。)五〇一では、神を迎える神事での「をとめ」の所作である「袖振り」から、布留山の瑞垣を歌い起こし、その瑞垣のように長く続く私の思いであることよと述べている。この私の思いが詠み手の妻に向かうものであることは、これに続く五〇二、五〇三の歌に、「東の間も妹が心を忘れて思へや」、「家の妹に物言はず来て」とあることからわかる。五二二は、「をとめ」の持ち物である神具としての櫛を持ち出し、妹に逢えないおかげで櫛のように「神さび」た自分になってしまつたという。ともに、序詞であり、神に奉仕する「をとめ」のイメージが妹(妻)に対する思慕の情を呼び起こす働きをしている。「をとめ」という語を詠みながら、「をとめ」への恋を詠むのではなく、「をとめ」によつて喚起される、妹への恋情を詠んでいるのである。

唯一、三二五五のみが、「をとめ」への恋心を直截的に詠む。その恋の思いは「苦しきもの」であるというが、「心もしのに人知れずもとなぞ恋ふる」という嘆きの理由を、「をとめ」が心を知らにそを知らむよしのなければ」と、「をとめ」の心の内を自分が知ろうとしても到底及ばないからだとする。私の心と「をとめ」との乖離、

「をとめ」の存在の不可思議さを強調する表現であるということもできよう。この「をとめ」と我の意識の距離は、常に遠くから「見る」存在であった雑歌の「をとめ」との共通点であるともいえる。

さらにここで、をとめは自ら恋の思いを詠んでいないことに気づく。これは、自らを弱きものと規定し恋の苦しみや悩みを詠んだ「たわやめ」と対照的である。万葉集には、

ひぐらしは時と鳴けども恋しくにたわやめ(手弱女) 我は定まらず泣く (⑩一九八二)

逢はむ日の形見にせよとたわやめ(多和也女)の思ひ乱れて縫へる衣そ (⑮三七五三)

などの歌がみられるが、「たわやめ」が一人称である「我」と結びつくことで、自らの心を開陳する術を獲得したのに対し、「をとめ」は他から「見られる」立場に止まっている。この距離感こそが万葉集の「をとめ」像を形作るものであり、その姿を見ることによって、宮廷に対する讚美や妹への思いなどが喚起され、その思いを歌に詠んでいくというところに、「をとめ」を詠む意味があったのである。¹²⁾

三 「をとこ」の変容

つぎに、「をとこ」の歌についてみていくことにする。万葉集に、「をとこ」を詠んだ歌は多くはない。¹³⁾「をとめ」がさかんに詠まれていることと対照的である。

「をとこ」のうたを概観してみると、こちらも「をとめ」と同様、雑歌或いは挽歌がほとんどで、相聞に分類される歌はわずかに二首のみである。作者判明歌からみると、

もののふの臣のをとこ(壮士)は大君の任けのまにまに聞くと
いふものぞ (③三六九)

千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべきをとこ(男)とぞ
思ふ (⑥九七二)

をとこ(士)やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立て
ずして (⑥九七八)

などという歌がある。「もののふの臣の壮士」は、天皇の命に従う立派な官人の意であり、九七二の「をとこ」は千万の軍にも立ち向かう兵士である。九七八では、後世に語り継ぐべき名を残す者であると詠む。こうしてみると、これらの「をとこ」は何れも、他の男子の呼称である「ますらを」に近い存在で用いられているように思われる。

「ますらを」とは、万葉集に頻出する男子の呼称である。「益荒夫」などの表記があり、

ますらを(大夫)のさつ矢手挟み立ち向かひ射るの方は見るに
さやけし (①六一)

ますらを(大夫)の鞞の音すなりものものふの大^{おほまへつきみ}臣^{おほみ}楯立つら
しも (①七六)

とあるように、原義としては、身体的・精神的にすぐれた理想的な男性を表すことばである。家持にも立派な武人の意として「ますらたけを(麻須良多祁乎)」(②〇四四六五)の語例があり、「益荒+武+雄」などの字をあてられると考えられる。「ますらを」は、やがて律令制の確立に従い、制度下の立派な官人をさすようになる。さらに、

ますらを(大夫)は名をし立つべし後の世に聞き継ぐ人も語り
継ぐがね (⑩四一六五)

のように、強い意思に支えられ、感情に流されない冷静さを持ち、恋の思いに沈んだりほしくない。また、世間に対して名を立てることを誉れとする。他にも憶良の歌に、

……ますらを(麻周羅遠)のをとこ(遠刀古)さびすと剣太刀腰に取り佩きさつ弓を手握り持ちて…… (⑤八〇四)

とあり、ここでは、「ますらを」と「をとこさぶ(をとこらしくなる)」が並べて用いられていることから、先にあげた三首の「をとこ」は、まさに「ますらを」と同義であるといってもよい。始原では神事に関わる者という点で「をとめ」と同義であった「をとこ」だが、前章でみた如く、「をとめ」がその聖性を保存し、その姿を見ることが讃歌の対象となつているのに対し、「をとこ」はその意味を変化させているようである。

「をとこ」が、歌の中で「をとめ」とともに詠まれている歌は、筑波山の歌垣の歌と、竹取翁の伝説歌、または処女墓伝説の歌である。筑波山の歌垣の歌では、「をとめをとこ(未通女壮士)」と並んで詠まれ、神事に参加する男女という原義に近い用例であることは前に述べたが、竹取翁の伝説歌(⑩三七九一)などでは修飾的な部分に用いられるに過ぎない。

このうち、虫麻呂と家持の所謂「処女墓」伝承の歌(⑨一八〇九、⑭四二一一)には、二人の「をとこ」が「菟原處女」に恋する者として登場する。しかしこの恋も、二人の想いの狭間で苦しむ菟原處女の自死とその後を追う二人の「をとこ」の悲恋の物語として終わっており、成就することはない。

この他に「をとこ」が恋するという表現は、人麻呂の「泣血哀慟歌」(②二一〇)、「泣血哀慟歌或本歌」(②二二三)、高橋朝臣の「悲傷死

妻作歌」(③四八一)という、挽歌にあらわれる。妻に先立たれた男が亡き「妹」を偲び恋するという内容である。そして、恋する相手の不在ゆえに成立し得ない妻恋いの心はいずれも、「をとこじもの」「つまり、「男らしくもなく」、「男のくせに」抱く恋心として詠まれる。

この「をとこじもの」という表現は、立派な男らしさを一たん否定したところに立ち現れる感情を表す語で、恋を詠まない「ますらを」が、一たん「ますらを」らしさを否定し、自らを「ますらを」と思へる我」と規定することで恋の思いを表現する方法に共通する。

ここまであげてきたのは、雑歌、挽歌にあらわれた「をとこ」の歌であったが、相聞歌に分類される二首の「をとこ」の歌はどうだろうか。

吾が衣人にな着せそ網引する難波をとこ(壮士)の手には触るとも (④五七七)

は、私が贈る衣を、浜で網を引く「難波壮士」の手に触れるとも、決して他人には着せるなという歌である。旅人が新しい袍を攝津大夫であった高安王に贈った時の歌であるとされ、男同士ながら男女の衣の贈答になぞらえた戲笑的な歌であるといえるが、その中で「難波壮士」をその衣にふさわしからぬ者と詠んでいることは、「海人をとめ」が見るべきものとして盛んに詠まれたことと対照的であるといつてよい。「をとこ」は讃辞の対象にはなりにくく、讃める場合は、あえて「ますらを」という言い方をするようになっていくのである。

さらに問題となるのは、もう一首の相聞歌の「をとこ」の詠み方であろう。

面形の忘るとあらばあづきなくをとこ(男)じものや恋ひつつ
居らむ (11)二五八〇)

「男でありながら、恋する相手の面影が忘れられない」と恋に對する弱き心を披露するのだが、ここでも恋する者は「をとこ」ではなく「をとこじもの」として登場する。これも、

巖すら行き通るべきますらを(健男)も恋といふ事は後の悔あり (11)二三八六)

などにあらわれた、恋を詠みにくい「ますらを」に對し、
……ますらを(大夫)と思へる我もしきたへの衣の袖は通り
て濡れぬ (2)二三五)

のように、その価値を逆説的に捉え直そうとした、「ますらを」と思へる我」の詠み方そのものであると云ってよいだろう。用例が少ないので、断定することは難しいが、相聞歌に關しても、「をとこ」はすでに「ますらを」と同義であるといつてよいのではないか。

もう一度、「をとこ」を詠む歌を振り返ってみると、詠み手の多くが男だったことも關係するのか、「をとこ」自体を讚める歌は殆どない。また、女は「をとこ」への憧れをあまり詠まないが、これは、歌の詠み手としての女が自分の思いをあまり表へ出さないという性質を持つていたという問題でもあろう。『万葉集』で「をとこ」を讚める場合は、「をとこ」自身の姿が美しいというよりも、武人としての働きのいかに素晴らしいか、官人として何を為したかなど、後天的な要素である、社会的な地位や業績が評価の中心となつてゐることに気づく。「をとこ」自身への恋愛感情や男性としての魅力を排除したところに讚めが成り立って行くのである。「をとこ」は自らの持つ意味を次第に「ますらを」へと變化させ、讚美の對象とし

ての「ますらを」に譲つていった。

一方で、男は盛んに「をとめ」への憧れを詠む。「をとめ」を讚める場合は、「をとめ」の容姿や女性としての身体的特徴、性的な魅力を美しいと讚え、それを美なる姿と捉えて「見たい」と希求することが多い。「をとめ」讚美の根底には「をとめ」に對する恋情があり、「をとめ」を詠む歌はそこに立脚した表現であるといつてもよいであろう。「をとめ」讚美の中心は「をとめ」の存在そのものにあつたのであり、それは、『万葉集』の時代を通じて變化することはなく、「をとめ」は「をとめ」で在り続けたのである。

註(1)「をとめ」の訓について、例えば、「嬢子」は、

袁登賣に 直に遇はむと 我が黥ける利目

とうたひき。故、其の嬢子、「仕へ奉らむ」と白しき。(中・神武東征)

から「嬢子」=「袁登賣」と考えられ、「をとめ」と訓むことが判る。次に、

倭の 高佐士野を 七行く 袁登賣ども 誰をし枕かむ

とまをしき。爾に伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てりき。

(中・神武東征)

とあることから、やはり「媛女」も「をとめ」と訓むことが判る。また、

天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の辺に衣洗へる

童女ありき(下・雄略天皇)

にある「童女」を、後にこの物語中の歌で「加志波良袁登賣」と詠んで

いることから、「童女」を「をとめ」と訓んでよいだろう。また、

更に大后と為む美人を求ぎたまひし時、「此間に媛女有り。……」

(中・神武東征)

の部分では一つの文の中で「美人」を「媛女」と言い換えている。前に「媛女」が「をとめ」と訓めたから「美人」も「をとめ」と訓める。「少女」

については、『日本書紀』神代に「熹哉、遇可美少女（烏等咩）焉」とある。「を」とこでは、「壯夫」に対して「訓壯夫袁等古」（上・大国主命）、「訓壯夫云遠登古。下效此」（上・火遠理命）との割注があり、「を」とこ」と訓むことが明らかである。

(2) 「をとめ」「をとめら」を含む歌は四十首、「何某をとめ」と詠まれる歌は三十五首ある。

(3) 折口信夫『万葉集研究』（『折口信夫全集』第一巻・昭和五十年九月・中公文庫）

(4) 折口信夫『若水の話』（『折口信夫全集』第二巻・昭和五十年十月・中公文庫）

(5) 天皇の「遊行」の例は、『古事記』雄略天皇の条に、「亦一時、天皇遊び行で（遊行）まして、美和河に到りましし時、河の邊に衣洗へるをとめ（童女）ありき。」とある。

(6) 猪股ときわ氏によれば、「行幸」は、「はつきりとした目的地へ向って行く場合」であり、「遊行」は「目的を定めず野や水辺を歩き行くこと」と厳密な使い分けがあるとす。氏は、「遊行」及び「遊行女婦」の分析から「人はあくまでも人工的にヲトメとなり、ヲトコとなる」とし、ヲトメ、ヲトコに特有の装い、しぐさがあるとす。（猪股ときわ「出逢いという事件」「遊行と歌垣」「歌の王と風流の宮」二〇〇〇年十月・森話社）

氏の説は、ヲトメ・ヲトコの特徴が「視覚」「見た姿」に支えられるものであるという点で、私見と通ずるところがあると考えられる。

(7) 森朝男「比喩としての〈ををとめ〉」（『恋と禁忌の古代文学史』二〇〇二年十一月・若草書房）

(8) 森朝男氏は、「……が逢ふ」という表現には、逢魔的な出逢いの意味があるとする。（『逢ふ』『古代和歌と祝祭』一九八八年・有精堂）

(9) 保坂達雄「海の行事と留守官の歌」（『神と巫女の古代伝承論』二〇〇三年三月・岩田書院）

(10) 森朝男 註⑥に同じ。

(11) 菊池威雄氏は、「大伴家持―家持とヲトメ群像―」（『和歌文学論集・

うたの発生と万葉和歌』一九九三年・十月）で、万葉集のヲトメ歌を社会的階層の視点から分類、検討し、ヲトメ歌の特色をヲトメに対する美意識の面から探求し、「表現者とヲトメとは決して同一平面に立つことは許されないのである。そうした両者の落差を意識したとき表現者の前に立ち現われる女性はヲトメと歌われるのである。」と指摘している。

(12) 「をとめ」を「見る」ことに「をとめ」との出逢いや「をとめ」の存在の重要性をみていくことは、後に家持などが、「をとめ」のいる景を、一つの絵画的な美的世界として歌い描くことに結晶していくと考えるが、本稿ではそこまで触れることはできない。

(13) 「をとこ」を詠む歌は五首、「何某をとこ」「をとこじもの」などの複合語であられるものが二十三首ある。

※ 本文は、日本古典文学体系『古事記』（岩波書店）、日本古典文学体系『風土記』（岩波書店）、鶴久・森山隆編『萬葉集』（おうふう）に拠った。

（本学博士後期課程）